

ノーマン全集の 完結にあたって

大窪 憲二

一昨年秋以来手がけてきたハーバート・ノーマン全集編集の仕事も、二月末に最終第四巻が刊行されたことをもって一応完結した。この仕事の出来ばえについては、私自身必ずしも満足しているわけではないが、永いあいだの念願がともかく果たされたことに、やはり幾多の感慨を禁じえない。それはどういふ感慨かときかれても言葉にはなりにくい。感慨かといえ、ノーマンさんへの新たな追懐と寂寥の想いであろう。

ランキン大使に「ノーマン全集」を献呈する大窪氏。



ノーマン著作集をまとめたという話が書店からあったのは一九六四年の頃であった。当時一九五八年からノーマン夫人の発議によって設けられていた「ハーバート・ノーマン記念研究奨励基金」の運営が受賞候補選択の困難から打ち切りになった事情のもとで、関係委員であった都留重人、渡辺一夫、丸山真男、西田長寿の諸氏と幹事役の私を含めて五人で著作集のことを協議したが、いろいろな理由から立ち消えになったまま時間が経過した。私としてはノーマンさんの論稿は既発表のもの以外にも有るはずだからそれらも著作集には含め

たいと考え、そのためにはもつと時間をかけて待った方がよくなるかという気持もあつたことは事実である。その後一時書店から私単独の編集でやってみないかという提案があつたが、私は別に自分の課題を抱えてもいたし、結局煮え切らない態度しかとれず、書店の関係者に迷惑をかけた点もあつた。また一九六五年の秋、オタワにノーマン夫人を訪う機会もあつたのに、この時は格別の話も出ずに終つた。しかし、その間にもこの著作集のことが私の念頭をはなれたことはなかつた。

一九七三年になって、私はウイスコンシン大学のジョン・ダワー教授の訪問を受けた。ダワー氏は、ベトナム戦争以後アメリカのアジア学者また日本研究者のあいだに起こつた体制派近代化論者への批判の気運のなかでノーマンの歴史学への従来の無視から再評価の動きが起つていふことを語り、私の保存している英文の原稿類をはじめ関係資料を閲覧したいと申し出た。私は氏にこれらのコピーを提供するとともに、幾たびか夜を徹してノーマンについて語り合ひ、また、当時英文の稿本のままになっていた「日本政治の封建的背景」(全集第二巻所収)への著者による書き入れの一つ一つについて協力して、校訂を施した。ダワー氏は、この論稿に加えて、「日本における近代国家の成立」(全集第一巻)、および歴史随想「詩神の苑に立つて」(全集第四巻)をノーマン選集として一冊にまとめ、The Origins of the Modern Japanese State と題し、なおこれに氏自身の一〇〇頁に及ぶ「ノーマン論」を添えて、一九七四年にパンテオン社から刊行した。この選

集は賛否両論を含めて、大きな反響を巻き起した。私が何ほどか協力または助言したとはいっても、本書はあくまでダワー氏自身の労作であり、私はアメリカおよび西欧の日本研究の現状において高い評価を受けるべきものと考えるが、通読してみても、これがノーマンか、またその歴史学か、と考えてみると、どうもダワー氏は全体としてノーマンを急進主義の戦士として描いているような印象を免れなかつた。それは一面たしかなことではあるが、ノーマンを歴史のなかに位置づけるかわりに、現在も進行中の冷戦の構図のなかに置くことについて、多少の異和感があつたのである。

いづれにしても、ダワー氏来訪以来のことの一つの刺激となつて、私は書店とも打合せのうえ、ノーマン著作集にとりかかつた。時はすでにノーマン歿後二十一年に近づいていた。その時を期して、というこで書店とのあいだに「気合」の一致というか、一つの雰囲気盛り上げてきたのを私は感じた。そこで一九七六年夏、カナダ外務省および在日大使館の好意により、私はオタワに行き、二週間余にわたり外務省歴史部においてノーマン関係のファイルを閲覧し、かれの数名の元同僚の人びとも会見し、ノーマン夫人とはほぼ五回にわたつて長時間会談することができた。夫人は永く夫君の書類鞆に秘められていた遺稿の数々を私に託された。

また、九月初めの或る夕方、ノーマン夫人は私をオタワから一五マイル離れたサマー・ハウスに案内され、ガテノー河の黒々と底深く流れる川面をながめながら、炬火をかこんで夜の更けるまで、在

りし日の御主人のことを細々と語つて下さつた。私はいくつかの質問を心に用意してはいたけれども、カイロにおけるノーマンさんの、殊に最後の日々については一言も尋ねる「勇氣」をもち合せていなかったことを告白しなければならぬ。その模様を私は、オタワからバスで西へ二時間半ばかりのところにあるピーターバラ郊外に隠棲する当時の一等書記官アイサー・キルゴア氏から二日にわたつて聴取することになった。トロントでは実兄のハワード・ノーマン、チャールズ・テイラー、ジョン・ホームズ氏なども会見した。バンクーバーではパシフィック・アフエアズの編集をつづけている旧知のホランド氏などと話合つた。カナダは東も西も秋の色がすでに濃厚であつた。それからの一年余り、ランキン大使をはじめ大使館の諸氏の理解と励ましとは、私が全集を完結するうえに大きな力となつた。またそれは秀れた先輩に対する大使館の方々の尊敬の表われとして、私は深い感銘を受けた。そこで私は、かつてノーマンさんが代表部首席として坐つていたその同じ部屋で、全集一揃をランキン大使に献呈したのである。

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を表わすものではないことをお断わりします。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。なお、ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

東京都港区赤坂七丁目三番三十八号
カナダ大使館広報部